

五木寛之
エッセイ全集

風に
吹かれて

五木寛之エッセイ全集・第二卷



風に吹かれて

講談社

昭和五十四年十月十八日 第一刷発行

定価 九八〇円



五木寛之エッセイ全集 (第二巻)
風に吹かれて

著者 五木寛之

発行者 野間省一

装幀者 岡村元夫

写真 横見肇(函) 野上透(口絵)

印刷所 図書印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

製函所 文京紙器株式会社

用紙 本州製紙株式会社/ダイニツク株式会社

発行所 株式会社 講談社

〒一〇二東京都文京区音羽二ノ十二ノ二十一

電話〇三(九四五)一一一一/振替・東京八―三九三〇

五木寛之エッセイ全集・第二巻——風に吹かれて・目次

赤線の街のニンフたち	9
おでん屋とテレビ局	16
二十五メートルの砂漠	22
歌はどこへ行ったか？	29
横田瑞穂先生のこと	35
先生商売に悔あり	39
鮎とカメラと青年	46
私たちの夜の大学	52
最初のミニスカート	58

S K Dの娘たち

トーポリの流れる街

モスクワの天保銭

古い街の新しい朝

欧州無宿の若者たち

誇りたかき日本人

アカシアの花の下で

二十二年目の夏に

新宿西口の酒場で

われらの時代の歌

サーカスの歌悲し

132 126 120 114 108 102 96 90 84 77 65

飛行機によせる郷愁	139
光ったスカートの娘	146
ある晴れた日の午後	152
奇妙な酒場の物語	159
競馬その他について	166
女を書くということ	173
わがダンス研究小史	180
おろしや語奇談	186
古新聞の片隅から	193
流行歌はどこへ行く	200
花の巴里の流し歌	207

奇妙な事務所の午後

古本名勝負物語

自分だけの独り言

十二月八日の夜の雪

独りでする冬の旅

わが新宿青春譜

百年よりも二十年

優しき春の物語

明治百年の若者たち

あわて者の末期の目

森と湖に囲まれた国

赤線と青線の間に
北国のオブローモフ
春宵一刻価六千金
スポーツの戦後史
果てしなきさすらい

解説／駒尺喜美

風に吹かれて

（一九六七年四月～六八年三月雜誌連載）

赤線の街のニンフたち

ある作家から、

「きみはセンチュウ派か、センゴ派か」と、きかれた。

ピンときたので、

「センチュウ派です」

と、答えた。

その作家は目尻^{めじり}にしわをよせてかすかに笑うと、それは良かった、と言った。

良かった、と言うべきではないかもしれない。だが、私には、その作家の言葉にならない部分のニュアンスが、よくわかった。

おくればせながらも、センチウ派の末尾に位置し得たのは、良かったと思う。だが、良かったから元へもどせ、などとは言いたくない。滅んだものは、もうそれでおしまいだ。どんなに呼んでみたところで、ふたたび返ってきはしない。

後はただ白浪ばかりなり――。何の文句だったろうか。終ったお祭り。紀元節。失われた祝祭を復活させようとするのは、空しいことだ。私は、そう思う。

良かった、というのは、過去の記憶を飾るささやかなリボンにすぎない。センチン派は皆、それぞれのリボンを頭に結んでいる。私のそれは、短くて貧弱だ。だが、風が吹くたびに、そいつが揺れるのを私は感じる。そのことを少し書こう。いわゆる赤線廃止のまえに、その巷ちまたに一瞬の光陰を過した〈線中派〉の感傷である。

そのころ私は、池袋の近くに住んでいた。立教大学の前を通りすぎて、もっと先だ。

十畳ほどの二階の部屋に、十人ほどのアルバイト学生が住込んでいた。私もその一人だった。呆あきれるほど金のない連中ばかりで、何だかいつも腹をすかしていたように思う。

仕事は専門紙の配達である。業界紙とは言わずに、専門紙と言っていた。世の中に、これほど様々な新聞があることを、私はその職場ではじめて知った。有名なものもあり、そうでないものもあった。

株式新聞、重工業新聞、日本教育新聞などが有名なところだった。ほかに数十種の専門紙があった。

毎朝、まだ暗い東京の街を、私たちは青い自転車を飛ばして出勤した。目白を通り、飯田橋を抜け、日本橋の一角まで、十数台の自転車を連ねて全力疾走する。

事務所で各自の新聞を揃え、配達にかかるのだが、その地区たるやべらぼうな広さだった。

そのため私は今でも、月島や、佃島のあたりの路地を頭の中に思いうかべることができるし、町屋や、葛西橋あたりの地理もくわしい。

「ついに一ドル相場実現……」

という証券新聞の大見出しを憶えているから、たぶん世間は景気が良かったのだろう。

だが、私たちは、少しも、良くなかった。配達を終えて、また自転車を池袋方面へ走らせる時には、うんざりしていた。金もなかったし、ひどく疲れていた。

そんな中でも、やはり時には女のいる街へ出かけた。どこをどう工面したのか、記憶にはない。今おぼえているのは、フージェーエフとか、カタージェフとか、オストロフスキイとか、その度に古本屋へ持って行った作家たちの名前だけだ。

新宿二丁目あたりは問題にならなかった。あんな所はブルジョア階級が豪遊する場所だと思

こんでいた。一度だけ、配達用の青自転車で駆け抜けたことがある。豪華さと、美人が多いのに驚嘆した。少なくとも、当時の私には、そう思われた。

私が時たま出かけるのは、北千住^{きたせんじゅ}の街だった。立石^{たていし}や、鐘ヶ淵の方面へは、近くの採血会社の帰りに寄ったりした。

新宿の街は、そのへんといろんな面で違うように観察された。だいいち、名前が高級だった。英語や、フランス語や、ドイツ語の名前の店が、そこにはある。

私の知っている北千住の店は、〈正直楼〉といった。女の子の名前が、マツという。それにくらべると、新宿には、アンヌとかエリカなどという女がいそうな気がした。

視線が合うと、すっと伏目^{ふしめ}になって半身を扉の陰に引くようにする。新宿の客は知的なので、こんなソフィステイケーションが有効だったのかもしれない。

私は新宿に感心したが、自転車からは降りなかった。私の行くのは、お化け煙突の街だった。月のなかばに、週末をさけ、出来れば雨降りの夜をえらんで三河島の駅から歩いた。夜半を過ぎると、四百円くらいで泊れることもあった。

だからといって、待遇が悪いということはなかったように思う。女の足音を待ちながら、雨の夜明けに戦前の〈家の光〉などを読んでいると、そのまま眠ってしまうことがあった。朝、五時

から自転車走らせているのだから、無理もなかった。

冬の終り頃だったろうか。そのまま、女が金を帳場に持っていった間に、眠り込んでしまったらしい。目を覚ますと、五時だった。女は私の隣りで寝ていた。

「なぜ起こさなかったんだ」

「だって、兄ちゃんが、あんまりぐっすり寝込んでるもんだから——」

東北から出て来て六ヵ月という女の子は、しんそこ恐縮しているように見えた。自分が帳場に行ってもどって来た何分かの間に、あんたはもう眠っていた、よほど疲れているに違いないと思つて起こさなかったのだ、と彼女は言つた。

「帰る」

と私は言つて服を着た。配達の間がせまっていた。

「まだ暗いよ」

「配達の仕事があるんだ」

彼女は、玄関で私の靴をそろえ、

「ごめんなさいね」

と、訛りの強い言葉で囁いた。「そこまで送っていく」

私は、その日に限って青自転車に来ていた。車のスタンドを靴先でボタンとはねて、私は走りだした。

「ちょっと待って」

と、女がうしろから叫んだ。彼女は着物の前を片手で押さえて玄関に駆け込んだ。何か果物でも持って出てくるのだろうか、と私は想像した。女が出てきた。

「ほら。うしろのタイヤが抜けてる」

と、彼女は手に下げてきた空気ポンプを差し出して言った。私は、がっかりしたが、自転車を立て、空気ポンプを受取った。

「あたしがやってあげる」

女はたくましい腕を見せて、空気ポンプを押した。ギュツ、ギュツと音を立て、タイヤが固くなった。

女はポンプをはずすと、手でタイヤをにぎり、

「固くなった」

と、言って、一瞬、照れたように笑った。

「これで大丈夫」